

[100] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2244042>

出版情報：史淵. 100, 1968-03-01. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

史淵筆者別索引

自第一輯
至第二〇〇輯

今来 陸郎

氏名 題 目 輯 頁

ア

- 青木 義憲 三河一向一揆の研究 九・一〇七
- 有光 保茂 博多商人宗金とその家系 一六・二〇一
- 安藤 精一 近世初期農村社会の構成 四三・九五

イ

- 伊岐須 清 モダニズムの思想史的前提 一九・二〇六
- 井手 伸雄 七月王朝期におけるペリ建築工の運動
——とくに下請制廃止の要求をめ
ぐつて—— 一六七合・九九
一六八合・九九

- 伊奈 健次 中世に於ける社寺金融の特別低利率について 三・一六五

- 本邦仏事の高利貸徴利認容の根拠について 一一・九九

- 井上以智為 中世末期大湊海関の通貨について 一三三・四九

- 盧山文化の黎明 八・五三
- 盧山文化と懸遠 九・一

- 井上 忠 福岡藩における洋学の性格 三〇合・一三五
- 井邊 一家 章学誠の方志学 五・二七

江嶋 寿雄

海防論者としての魏默深 八・一一五

喝爾丹侵入当時の外蒙略爾略 一九・二二六

十五・六世紀におけるドイツ都市

市民の階層分化について 四六・四五

ドイツ中世都市の貴族団体 五〇・四九

アウグスブルクにおける帝国都市の成立 五九・二五

中世都市における市民と政治

——イタリヤ都市を中心として—— 六五・五一

アウグスブルクにおけるツンフト

斗争の市政 七四・一

転換期の騎士団国家(十四・五世紀

の交の様相) 八〇・五五

騎士団国家の起源(再論) 八六・一〇三

ドイツ騎士団国家の終末 九三・八五

ドイツ騎士団国家解体についての

若干の問題 一〇〇 三一

エ

明末満洲に於けるガシヤンの諸形態 三二・一

清初史に於ける二三の問題に就て 四二・一一一

安楽自在二州に就いて 四八・五五

太監亦失哈に就いて 五〇・一九

明初女直朝貢に関する二三の問題 五八・七一

明代女直の馬

六三・九三

遼東馬市管見

七〇・二七

明代女直朝貢貿易の概観

七七・一

統遼東馬市管見—元良哈馬市の再開に就て—

八三・六三

明末遼東の互市場

九〇・六七

明末遼東の互市場補遺

一〇〇・一五七

宇佐使についての一考察

八八・一一一

恵良 宏

オ

太田 等

サモア紛争—アメリカ合衆国外交史の一考察—

一九・一八九

大畑 勝

ロシア第一国会と農民運動の性格

九六・九一

大村作次郎

一九〇七年に於ける英露協商成立の研究(一)

三・一三二

〃

(一)

六・六七

最近帝国主義勃興の経済的原因に就いて

四・五六

セラエブ事件に対するセルビヤ政府の責任(一)

七・一五三

〃

(一)

八・一

一九二二年の「ハルデン派遣」を主とする英独海軍関係

一一・七五

〃

(一)

一二・二三三

岡崎 敬

〃

(三)

一三・一一七

隋趙国公独孤羅の墓誌銘の考証—

陝西省咸陽・底張湾の北周・隋

唐墓—

八三・三一

雲南石塞山遺跡と銅鼓の問題

八六・五一

唐・張九齡の墳墓とその墓誌銘—

広東省韶関市近郊の壁画墓—

八九・四五

安岳第三号墳(冬寿墓)の研究

—その壁画と墓誌銘を中心とし

て—

福岡県飯塚市立岩遺跡発見の前漢

鏡とその銘文

九九・七七

「漢委奴国王」金印の測定

一〇〇・二六五

グレイ内閣の選挙法改正に於ける

上院議員任命問題

一五・一六六

豊前に於ける新羅系古瓦とその意義

—九州発見朝鮮系古瓦の研究(一)

九五・一二九

百済系单弁軒丸瓦考

—九州発見朝鮮系古瓦の研究(二)

九五・一二九

横穴式石室古墳における複室構造

の形成

一〇〇・二八一

南朝の貴族と豪族

劉宗の官界における皇親

六九・一

東晋の豪族

七四・一七

南朝の租・調

七六・一

八〇・一

魏・晋の客戶について 八二・ 四九

晋爵と宋爵―再び「劉宋の五等開 八五・ 三九

國爵と貴族」について 八八・ 三九

六朝における喪服制上の二問題 九一・ 三七

南北朝時代の幹僮・雜役・雜使・ 九四・ 三三

雜任などについて 九七・ 三五

州大中正の制に關する諸問題 九八・ 一五

梁陳時代の甲族層起家の官をめぐ 一〇〇・ 一九

つて 九五・ 一七

南朝の清官と濁官 一〇〇・ 三二三

累世同居の出現をめぐつて 〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

革命前ロシアにおける經濟地域区 〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

分研究 〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

ソ連地理学の現状をめぐつての議論 〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

―「文学新聞」紙上の論文を中心に― 〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

カ 元寇役恩賞地の配分に就いて 六・ 一二八

日韓關係雜攷 一三・ 一三一

太宰府蔵司の礎石と正倉院 一四・ 一

日本書紀に現れたる百済王曆に就 一五・ 八一

いて 一六・ 一一五

太宰府の遺跡と条坊 (一) 一七・ 二五

〃 (二) 〃 (中) 〃 (上)

日唐交通と新羅神の信仰 一八・ 六〇

〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

我が古代社会に於ける甕棺葬 二一・ 八三

原始箱式石棺の姿相 (一) 二五・ 一三一

〃 (二) 二七・ 四三

日本古代殉葬に就いての一考察 (一) 三五・ 六三

甕棺累考 (一) 五三・ 一

〃 (二) 五五・ 二五

石蓋土壙に關する覚書 五六・ 一六一

高塚古墳の源流 五八・ 三七

―支石墓と甕棺の行方― 六二・ 一

甕棺累考 (二) 〃 (一) 〃 (二) 〃 (四) 〃 (中) 〃 (上)

―甕棺の源流再考― 六六・ 一

奈良期の集落遺跡について 六七・ 一

環溝住居趾小論 (一) 六八合・ 一

〃 (二) 七一・ 一

〃 (三) 七四・ 四三

〃 (四) 七八・ 二九

庄園村落の遺構 八一・ 一

―筑後瀬高下庄の場合― 八四・ 三九

原生期の織布 八六・ 二五

―九州の組織痕土器を中心に― (上) 〃 (中) 〃 (下)

弥生期の水田区別について(上) 八九・七二
" (下) 九二・二五
" (中) 九五・九七
" (下) 九六・六三

加藤 知弘 商業的農業の発展

―エリザベス朝期― 六二・二七
ライン小国制度とその運命 二六・一一七
" 考

倉崎 繁

宋代の戸口統計上に所謂客戶につ
いて 七九・一〇三
南宋時代の淮浙塩鈔法 八六・二二三
モロゾフストライキについて
―労働者の意識の成長― 九〇・九五
豊前細川藩の「借米」について 八八・九九

辛島 重義
河井田研朗 "PALUM"考

―起源より教会法的制度化に至る迄―

桑波田 興

水戸学と仏教 四・六八
後三条天皇の御讓位に就きて 一八・八四
ポピュリズムの発展と通貨問題 八七・二三二
チャーティズム末期における社会
主義 八〇・七七

川添 昭二 日蓮の宗教の成立及び性格

―鎌倉仏教研究序説― 六六・五九

河野 福夫
河野 房雄
古賀 邦子
古賀 秀男

キ

菊池 英夫 唐代府兵制度に関する一疑問

唐代兵募の性格と名称と 五八・九五
について 六六・七五
五代禁軍に於ける侍衛親軍司の成
立 七〇・五一

小林栄三郎

ブロンテル・オブライエンとアイ
ルランド問題―"Schoolmaster of Charism"
の研究― 一〇〇・一三三
ビスマルクと墮匈国内の独逸族 五・五一
再保険条約不更新とホルシュタイン
ンの心境 八・九七

岸田 勉 支那絵書に於ける写真思想の展開

―五代を中心として― 二七・八五

木原 淳幸 佐賀藩天保改革の問題点 一〇〇・八八

ク

草野 靖 占田課田制について 七六・八一

所謂ポイストの報復政策について
ヘーゲルの「ドイッ憲法」とドイ
ッ的自由 一七・五六

ヘルデルの政治的関心と「人性書

簡

一八・二六

ブーフエンドルフの「ドイツ帝国

政情論」について

一九・二三

自邦主義と系族―特にボイスト及

びダルヴィイクについて―

二〇・七四

モツシエロシュの祖国愛と外国文化

―特に「フライランダーの幻想」

について―

二一・三五

アーダム・ミュラーの世界史観と

ゲルマーニア理念

二三・二五

ヴォルテールの上代フランス観

シャーフツベリの精霊論とその影

響

ビューナウの「ドイツ帝国史」に

ついて―ドイツ国民意識の連続

性に関する一考察―

ドイツ晩期中世と人文主義

―国民意識史の観点から―

三〇・五三

ヒューマニストの古ゲルマン研究

について

三九・六九

エルヴェシユスの天才論における

矛盾

―「精神論」の知能平等説について―

ドイツ舊歴史学派における発展段

階と発展法則

サン・シモンの社会思想と宗教

―〔新キリスト教〕解釈の問題―

ウオードの天才論と社会主義

サン・シモン派の社会思想

―バザールを中心として―

サン・シモンの天才論

一八六〇年代のドイツ労働組合と

ツンプフト遺制(上)

〃 (下)

ヌストウス・メーザールの政治的関

心について

一八五〇年代のドイツ労働運動

「鎮静期」の問題(上)

〃 (中)

〃 (下)

一八六〇年代の労働運動と工場労働者

(上)

(下)

四〇・一〇九

五〇・八三

五二・四三

五四・四一

五六・一八七

五七・六五

五九・一

六二・四五

六五・二九

六七・二七

六八合・一

七〇・一

七三・一五

七九・三五

〃 (中) 八〇・二七
〃 (下) 八三・一

一八七〇年代および八〇年代のド

イツ労働運動の構造(上) 八六・一

〃 (中) 八八・一

〃 (下) 九二・一

第一次大戦前後のドイツにおける

「新中間層」と労働運動(一) 九七・一

〃 (二) 一〇〇・二五

サ

榊原 末一 日本書紀伝来と諸本に関する一

考察 三三・一

桜井 東樹 ジャクソニアン・デモクラシーと

銀行戦 四五・一〇一

讚井 鉄男 十九世紀独逸史学史の一齣

―所謂「プロシヤ派」に関する

一考察― 一〇・一四三

マツチーニと青年イタリヤ 一二・一四五

テーヌと歴史 二九・三一

サン・シモン公の備忘録 三四・一〇五

シ

重松 俊章 支那古代の物価調節策に就いて 一・七一

宋元時代の白雲宗門 二・三九
唐宋時代の弥勒教匪 三・六八
―附更生仏教匪―

唐宋時代の末尼教と魔教問題 一二・八五

敦煌本還寃記残卷に就いて 一七・二〇

魏略の仏伝に関する二三の問題と
老子化胡説の由来 一八・一

支那古代史の一觀察 一九・二三〇

支那三教史上の若干の問題 二一・二二五

宋元時代の紅巾軍と元末の弥勒・
白蓮教匪に就いて(上) 二四・七九

〃 (中) 二六・一三七

〃 (下) 二八・一〇七

〃 (下の二、完) 三二・八一

楽浪文化と日本の黎明 四〇・一七

―日本上代史の再検討― 五六・一九

大月氏民族史雑考 一四・三九

唐沙門法琳傳について 三・一四九

社会政策家としてのビスマルク
雅びの道 三六合・一〇五

―宣長の文芸論の一理解―

参詣發達の一前提 八二・一

―社会の援助― 八五・一

中世に於る能野信仰の發展

新城 常三

庄野 真澄

島村 保

城福 勇

能野詣での衰頹

八七・六一

瀬野精一郎

鎌倉幕府滅亡の歴史的前提
— 鎮西探題裁許状の分析 —

七五・七五

近世参詣に対する封建的規制

九〇・六一

タ

中世の駅制

九四・六九

竹内 理三

日本封建制と寺院

中世の北海道について

九七・六四

— 興福寺の場合 —

中世交通路の一考察

一〇〇・

天武「八制」制定の意義

明治初年における三治職制の府に
ついて

九四・九九

「知太政官事」考

佐賀支藩の蘭学について

一〇〇・二五一

律令官位制における階級性

— 小城藩の場合 —

四〇・二五

「参議」制の成立

旧唐書食貨志の史料系統について

四五・七五

附「知太政官事」考補遺

唐代均田法施行の意義について

五〇・一一七

郡衙の構造

隋末の乱と唐朝の成立

五三・五三

— 上野国交替使実録帳について —

清初兩淮塩商に関する一考察(一)

三五・一〇一

八世紀における大伴的と藤原的

中世に於ける領主権確立をめぐる
ての一考察

三六・二二五

— 大土地所有の進展をめぐる —

薩摩国谷山郡の場合 —

五四・六五

平安時代の古文書

興福寺講衆について

三〇合・八一

— 第一部 学風史的に —

— 特に検断を中心として

三一合・八一

薩摩の荘園

一特に検断を中心として

七一・二五

— 寄郡について —

七

七五・一

三四三

鈴木 正

鈴木 銳彦

鈴木 止一

史淵筆者別索引

七

七

七

七

七

七

七

七

七

九州地方古文書（慶長以前）の蒐

集整理

七八・ 一

竹岡 勝也

ものあはれと出家

—源氏物語の考察—

二・ 五六

国学者としての増穂残口の地位

三・一〇四

近世復古主義の源流についての考

察

七・ 八三

新井白石の古代観と神道観

八・ 三一

世界史と国民史

—滞欧所感の一節—

一三・一九一

浮世の成立（一）

一五・ 二二

〃 （二）

一六・ 二三

反復古主義者香川景樹

一九・ 八五

漢代文様の雲崗石窟に於ける展開

二五・一六五

中世神道と慈遍

二九・ 九七

「和学一步」と「奇観録」

三〇合・一六三

国学の理念と攘夷論への展開

三三・ 六九

ビスマルクの対社会民主党策

二〇・一〇一

室町時代に於ける貨幣の流通状態

一・ 五一

末法思想の形成

六三・ 六五

神国思想の承譜

七六・ 五五

飛鳥仏教雑考

七九・ 六三

陰陽寮設立以前

八二・ 二三

僧尼令成立の歴史的背景

八四・ 七一

神宮寺の創建

八七・ 八五

国家仏教の成立過程

九〇・ 一七

古代選宮考

九二・ 五三

仏教伝来の史実と説話

—津田左右吉氏の所論によせて—

九五・ 一

『金光明経』の受容と飛鳥仏教

九八・ 一

The Establishment of State

Buddhism in Japan

一〇〇・ 一

子

法皇レオ十三世論の一端

二・ 一

オリヴァ以後

三・ 一

ケレタロの罪の由来に就いて

五・ 一

シレジア地領継承の關係

六・ 三八

侯国政治訓論の一考察

七・ 一

生子信教に関するケルン諍論

九・ 三五

オルシニ事変の前後

一〇・ 五五

新尚古主義と二州問題の言論

一一・ 六三

一八七八年基教社会党の地位

一二・ 一

第二帝政末期六〇年代前期に於ける自由帝政の変革

一三・ 八九

ビスマルクの岐路と運命

一五・ 一

ビスマルクの七五年危機

一六・ 一

ビスマルクと伊太利戦役前後

一九・ 一

一八六九年の羅馬問題に就いて

二二・ 一

論證史学のフアタリズムとギゾオ

時代

ビスマルクの性格

ヴァンドーム広場事件の考察

ジャン・ボダンと近世史

『思慮と追憶』の第十八章

ミシュレ史学の地位

奈良政治思想の一断面

—天平三年を中心として—

ツ

筑紫 頼定

顯孝禅寺趾に就て

テ

鄭 賢奎

ジュール・ミシュレの反教会思想

ナ

中井 虎一

記紀の原始文化論的研究の諸問題について

中江 健三

嘉慶年間の英国の澳門占領について

武藤長蔵「日英交通史の研究」

(紹介)

長沼 賢海

鉄砲の伝来に就いて

伊曾保物語絵巻

暗黒時代の宗教一揆

元寇と神風

建武前後の神仏関係

元寇と松浦党

法華念仏両宗の展開と唯一宗源神

松浦党の發展及び其の党的生活(上)

海外交通史上の巻岐

懷良親王の征西路考

神道に現はれたる他力念仏の影響

鉄砲の伝来と其の普及

元亨釈書統考

門司関と門司氏

筑前麻生氏について

敵鳥附近の海上史(上)

〃 (中)

〃 (下)

「龍谷大学三百年史」(紹介)

島津氏の南方交通

—大迫文書に関する考察—

小早川氏の海上勢力

糸島水道と倭奴国

国際混血児

四・一

六・一

七・一一

九・六五

二〇・一

(中)一一・一五

一一・五五

一一・六三

一五・四五

一六・九三

一九・五一

二〇・一

二一・一

二二・一〇三

二四・九一

二五・一九五

二六・八七

二二・一四五

二七・一一五

二七・一三三

五〇・七

五六・四三

中村治兵衛

聖徳太子論考

一〇〇・一一

清代山東の学田

六四・四三

清代山東の学田の小作

七一・五五

宋代の地方区劃

八九・八五

―管について―

九六・三五

再び唐代の郷について

一〇〇・一六九

清代華北の都市の戸口に関する

一〇〇・一六九

一考察

一〇〇・一六九

中山平次郎

九州に於ける銅鑿

一〇・四一

二

西尾陽太郎

世阿弥の能楽論に於ける基調的思想

一六・一七九

心敬と禪竹

三六合・八五

不尽言と徂徠派

四〇・一三三

讃岐守時代の道真

四二・七九

能楽における芸術理念の生成

四二・七九

―特にその幽玄精神の成長について―

四四・五五

石門心学の発生について

四四・五五

―町人囊と都鄙問答との思想的

五〇・二七

関聯―

五〇・二七

明治二十年における中江兆民

五三・三一

―三酔人経綸問答をめぐる諸問

五三・三一

題―

五三・三一

樗牛における内面的必然性について

六一・三六

明治における国家と個人

六七合・五一

幸徳秋水の青年時代

七五・五一

―「明治における国家と個人」に關聯して―

七五・五一

明治における国家と個人(承前)

八一・九三

―石川啄木の場合―

八一・九三

所謂革命事件・天長節事件とその

八七・二〇五

周辺

九八・四七

黒田長溥と筑前勤王派

一〇〇・二〇五

日韓併合後の内田良平

七四・六三

ロシアにおける産業革命の時期について

九三・一〇九

ルソーの政治思想とその基本的性格―《自然状態》の論理構造―

一二・一六九

先秦に於ける王道論の展開

九一・二四一

江戸時代の遠賀川の水運

二八・一

―特にその機構について―

二八・一

ダニエル・レオンと米國社会労働党

一七・九一

源平合戦と緒方氏の拳兵

一七・九一

近世独逸猶太族とハインリッヒ・ハイネー

一七・九一

心として―

一七・九一

ジョン・ロックとアメリカ革命	四一・一〇三		
ビュリタニズムとアメリカデモクラシー—その関連性についての一考察—	四九・四九	羽生 健一	
ジェファスンに於ける所有権思想の「革命」	五〇・九五		
植民地に於けるアメリカ南部の職人について	五五・五三	原田 文枝	
ジェファスンとフランス革命	六〇・五一	檜垣 元吉	
ジェファスンにおける「社会主義」的立場—その財産権思想を中心として—	六六・四五		
再建期アメリカ南部におけるプランテーション農業制度の再編	七三・一四		
アラバマ再建と鉄道	七九・八一		
アンテイ・ベラム南部における奴隷プランテーションの収益について	八五・七五		
アンテイ・ベラム南部における奴隷貸制について	九二・七五		
アンテイ・ベラム南部奴隷制度をめぐる論争—レヴィジョニストの拾頭以後—	一〇〇・二一九		
ローマ共和政期に於けるシアのキリ	七一・七九	日野開三郎	
奴隷反乱と大土地所有			
共和末・帝政初期のローマ鉱山業の状態—イタリア及び西部諸属領における—	一〇〇・一八一		
北宋の巡検と保甲法	九二・九七		
北宋の善保について	九七・一〇七		
北宋沿辺五路に於ける保甲編排について	一〇〇・一四七		
釋一考	一九・二八八		
戦国時代の武家生活と学問—大内氏と毛利氏—	一八・一二五		
福岡藩政史の研究—天保の改革—	四〇・一六三		
〃	五四・八五		
原城一揆の研究	四七・六七		
九州石炭史の研究 筑前仲原村記録—(一)—	五〇・一〇五		
対馬藩寛文の改革について—大浦権太夫の失脚—	六二・六八		
福岡藩政史の研究—幕末の情勢—	六九・五七		
滝田紫城伝—福岡藩の洋学—	七七・七一		
唐津藩石炭史の研究	八二・八五		
中津藩の研究—福沢諭吉—	八八・七一		
近世矢部村の研究	九七・八三		
五代の沿徴に就いて	一三・一		

馬場 典明

唐・河陽三城節度使考(一)	一四・九	部考第一章―	三六合・一
〃	(二)	七部考第二章―	三七合・一
五代藩鎮の拳絲絹と北宋朝の預買	一五・一〇一	宋代稻作貸給種及布種畝額考	三八合・一
絹―五代苛政の一面―(一)	一六・六二	粟末蘇鞞の対外関係	四〇・六九
〃	(二)	―蘇鞞七部考第三章―(一)	四一・一
唐代の閉糴と禁錢	一九・一五八	〃	四二・一
神宗朝を中心として觀たる北宋時	二〇・二二	〃	四三・四九
代の結糴	二一・二二	蘇鞞七部考第三章附説―	四四・一九
唐代便換考	(一)	餘城―蘇鞞七部考第三章附説―	
〃	(二)	隋唐に帰屬せる粟末蘇鞞人突地稽	
〃	(三)	一党 附説唐に帰屬せる粟末蘇鞞	
五代閩國の対中原朝貢と貿易(上)	二六・一	鞞烏素固部 ―蘇鞞七部考第四章―	四五・一
〃	(下)	契丹の同跋部女直経略に就いて	四六・一
渤海・金のの建国と敦化地方の産鉄	二八・七五	〃	四七・三一
兀惹部の發展	(一)	〃	四八・二七
〃	(二)	渤海の扶餘府と契丹の龍州黄龍府	四九・一
〃	三〇合	〃	五一・一
〃	三一合	〃	五二・一九
〃	(三)	〃	五〇・三七
〃	(四)	稻 ―唐宋用語解の二―	
夫餘国考―特にその中心地の位置に就いて―	三四・一		
勿吉考	三五・一		
蘇鞞七部の住域に就いて―蘇鞞七			

隋の遼西郡に就いて 五五・一

宋代の賃牛に就いて 一宋代の賃

租牛と牛政の第一章 五六・八五

宋代の租牛に就いて 一宋代の賃

租牛と牛政の第二章 五八・一

宋初に於ける女直の山東來航(一) 六〇・一

大唐府制時代に於ける團結兵の稱

呼とその普及地域 六一・一

唐の高句麗討滅と安東都護府

高句麗國遺民反唐分子の処置 六三・二九

一「小高句麗國の研究」第二章一六四・一九

小高句麗の建国

一「小高句麗國の研究」第三章一七二・一

突厥默噠可汗の興亡と小高句麗國 七五・二二

突厥伽可汗と唐・玄宗との対立と

小高句麗國 七九・一

突厥の瓦解・渤海の跋鞞諸族併吞

と小高句麗國の九州増領 八一・六七

楊炎の兩税法の見居原則と錢數・

錢納原則 八四・一

玄宗の平盧軍節度使育成と小高句

麗國 八七・一

〃 (承前) 八九・一

安史の乱による唐の東北政策の後退

と渤海の小高句麗國占領 九一・一

渤海國の隆昌と小高句麗國の子國化 九三・一

小高句麗國の滅亡 九六・一

〃 (承前) 九八・七七

唐代域程考 一〇〇・二三三

最近世の米墨關係 三〇合・一〇三

契丹の勃興期に於ける中國との關

係 一漢城を中心として 五三・七一

平安初期における國司郡司の關係

について 七二・七七

フ

アメリカ史における革新主義の問題 五九・六七

T・ローズヴェルト独占資本一特に

北方証券会社解体事件を中心と

して 六五・七三

大名領國における糸割符制の

變遷と商人の動向 一〇〇・五七

イングランド初期王政 一ノルマ

ン及び初期ブランドジネット朝 一五六・一四三

十三、十四世紀の英國農村手織物

工業 一ギルド制度との關連に於

ける 五九・四七

リチャード二世及びランカスター

船木 勝馬

朝の羊毛政策
魏書烏孫国伝について — 魏書西
域伝批判への一齣 —

六四・ 一
五一・ 六九

三上 正利

大唐・玄宗の戸口充実と課丁析出
ミ
康熙時代におけるゼスイットの湖
凶事業

七三・ 六一
五一・ 二五

H. W. Bailey: Khitanese Buddhist

Texts (紹介)

五三・ 一〇五

欧露の森林ステップ帯及びステッ
プ帯の開拓

エフタルに関する中国史料について六一・ 五七

四四・ 八九

西シベリアの民族およびウラル
越え交通路

古川 新平

北宋前半期に於ける廢監租佃の間
題(一)

四七・ 八三

ロシア人の西シベリア征服とその
毛皮資源

ホ

(一)

一七・ 一〇一

一七世紀西シベリアの植民と農耕
地開拓

本城 説治

三代世表考 — 殷周始祖を中心と
して—

一九・ 二六五

十六・七世紀の北極海沿岸航路
— マンガセヤ航海 —

マ

(一)

二四・ 六一

長崎奉行長谷川左兵衛論考
— 近世外交政策の一考察 —

本田不二郎

義鑑時代に於ける大友氏
清代社会に於ける紳士の存在

二九・ 一

鎌倉時代に於ける起請文の成立と
その特質

本村 正一

晚清洋務運動史論

三三・ 一

佐嘉藩多久領地米制度の概観

前岡 良爾

ドイツ農民戦争における「過激派」の性格
— 農業労働者の分折を通して —

三八・ 二二二

三木 俊秋
三宅 英利

正木喜三郎

備中国新見庄の名主
— 十三・四世紀に於ける —

七八・ 六一

宮下 勝次

益田 健次

ブウランジェ運動

七・ 二三三

武藤 智雄

松垣 裕

北部イングランドにおけるマナの
構造

四八・ 八三

イタリヤに於ける歴史記述の契機
と展望

松永 雅生

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

室永 芳三

唐代の課について

五五・ 七一

五代の北面転運使について

森 克巳

仏舍利相承系図と日宋交通との連

関

日宋麗連鎖関係の展開

四〇・五一
四一・七一

宋銅銭の我が国流入の端初

四三・一

近世における対鮮密貿易と対馬藩

四五・四九

遣唐使と新羅・渤海との関係

四八・一

遣唐使廃止に対する再吟味

五〇・七一

欧船来航以前の海外交通と世界意

五二・七一

識

北宋初期の便羅に就いて

五一・五一

北宋四川の対羅に就いて

三・二八八
一〇・一〇五

森 洋

初期カペー王朝の *Domaine Royal*

— フイリップ一世の時代における

— (上) 七六・三一
〃 (下) 七七・二七

ゴティック古典様式カテドラルの成

立とその背景

— Chartres, Reims Amiensを中心として —

(上) 九〇・三九

(中) 九一・七五

(下の一) 九四・一

(下の二・完) 九五・五五

森 洋

F・ジュオン・デ・ロングレ

「エコール・デ・シャルトの業績」九九・一

シャルトル司教フルベールの一書簡の

解釈の試み

— 十一世紀の「封建制」の解明に寄せて —

一〇〇・一九五

森 祐三

クリッテンデン妥協案の反省と

奴隸制度

五二・七三

ヤ

若狭国太良荘の崩壊過程

一三・二五九

初期日西交渉の諸問題 — 秀吉のフイリ

ピン招撫をめぐる — 六一・二七

鎖国と平戸商人団

六六・二九

絲割符商人研究序説(一)

七〇・一九

近世都市長崎の形成

七三・一

一六四〇年のマカオ使節に関する

一資料 七八・一九

トルレ・ド・トンボ文書館所蔵「モンス

— ン」文書所収日本関係文書目録八三・一

分国系について一考察 八八・三一

朱印船制度創設記事の一考察 九三・三一

日本・メキシコ貿易の基調 九九・九一

安南史上の一政権として土堡 一一・一

南宋鎮撫使考 六四・六五

山口 宗之 安政五年の違勅問題をめぐる政治

思想的考察 五七・ 八五

安政五年の違勅問題をめぐる政治

思想史考察

―将連継嗣運動と尊攘派― 六〇・ 六九

山本 嘉蔵 福岡県成屋形の古墳について

(共著) 二・ 七七

山本 博 福岡県成屋形の古墳について

(共著) 二・ 七七

弥生式土器論と北九州 ―細線鋸

歯紋鏡の新奇―(一) 四・ 九八

〃 (二) 五・ 七四

ユ

幸 徹 北宋の過税制度 八三・ 八一

ワ

渡辺 正気 中世公家生活史考 ―特に近衛政

家の宗教生活について― 四六・ 七七

福岡県糸島郡旧糸島高等女学校出

土の甕棺 八一・ 一一七